

モーセの再来

革命軍

春日信彦

革命軍

7月7日（土）七夕の日、高級マンションのような安部医科大学学生寮の南面は、学生が深夜まで勉強していると見えて、夜空の星を思わせるような輝きがちりばめられていた。ひと段落ついた鳥羽は、赤鉛筆で黄色の短冊にへたくそな字で願い事を書いた。ウキウキ笑顔の鳥羽は、スキップしながらベランダに飛び出し、ベランダの東側に立てた笹の枝に短冊をつるした。そして、キラキラと夜空に輝く天の川に両手を合わせた。南から流れてくるそよ風にユラユラと揺れる短冊には、”ますますゆう子姫が健康で活躍されますように”と記されていた。

一生ゆう子姫にお仕えいたしますと心でつぶやいた時、突然、今朝、スマホから流れてきた安田のささやきがよみがえってきた。そのささやきというのは、全国から同志を集め革命軍を作っている。鳥羽も革命軍に入らないか？という誘いだった。学生が集まってデモをするのであれば、国家も多めに見てくれるが、何らかの武器を手に入れ武装行動に出れば、もはや、デモではなく、テロになってしまう。あくまでも、ストレス発散のたわごとだとは思ってみたが、すでに同志が集まり始めているのなら大変なことになってしまうと気が気ではなかった。鳥羽は革命軍に賛同する気はもうとうなかったが、安田の真意を確かめるために直接聞いてみることにした。

翌日の日曜日、鳥羽は安田を訪ねた。家族のものがいたなら、誰にも話を聞かれない場所で話をしようと思っていたが、幸いにも、安田一人だった。キッチンに案内された鳥羽は、神妙な顔で腰掛けた。安田は、革命軍賛同の返事を期待しているのか柔和な表情で鳥羽を見つめていた。鳥羽は、マジな顔つきで口火を切った。「革命軍の話は、マジですか？」安田は、大きくうなずき答えた。「マジさ。すでに同志は集まり始めている。ぜひ、鳥羽にも参加してほしい。腹は、決まったか？」

賛同する気がない鳥羽は、安田に何と言って返事していいか戸惑ってしまった。「僕は、武力には反対です。学生に武力は似合いませんよ。どうして、革命軍なんて作るんですか？学生デモでいいじゃないですか？警察に知れたら、逮捕されますよ。それでも、いいんですか？強行採決するような政府でも、話し合いで解決できるはずですよ」安田は、説教に来たことがわかり顔をしかめた。革命軍に反対するものに革命軍の正義を説明する気はなかったが、鳥羽には納得してほしかった。

「そう思うか？鳥羽もマフィア民主主義に洗脳された凡人ということだ。鳥羽は、天才だから、俺の気持ちがあわかってくれると思っていたが、残念だ。いいか、全国で、これだけデモをやっても、強行採決がまかり通るんだ。つまり、日本の政党政治はマフィアが作った単なるお芝居だったということだ。真の民主主義政治を樹立するには、革命しかないんだ。そして、革命を実行できるのは我々学生しかいない。俺たちが今、立ち上がらなければ、日本国家はマフィアがのさばる不法地帯になってしまう。いや、日本民族が皆殺しにあうかもしれない」

鳥羽は、目が点になってしまった。安田の被害妄想は、かなり進行しているように思えた。一時間ぐらいの説教では、治療できそうにないと判断した。しかし、このまま素直に被害妄想を認めてしまえば、ますます重症になってしまうと思えた。「先輩のおっしゃることはもったもです。でも、僕たちは、何のために大学で学んでいるんですか？話し合いで問題を解決するために大学で学んでいるんじゃないですか？武力で解決するのであれば、学生もマフィアと同じじゃないですか。武力に頼れば、マフィアを認めることになるんですよ」

安田は、自分たちの正義が鳥羽には全くわかっていないと感じた。「武力というが、なにも、刀を振り回そうというんじゃない。こぶしを武器とするにすぎない。そう、俺たちをテロ集団みたいに言うな。俺たちの革命は、単に政府を倒そうというものじゃない。日本民族の優秀性を世界に知らしめようという平和のための革命なんだ。鳥羽なら知ってるだろう。日本民族は、YAP遺伝子を持っている平和民族なんだ。今、平和民族である日本民族が絶滅する危機に直面している。マフィアは、平和民族である日本人が目障りなんだ。原発、カジノ、水道民営化、人工地震、不正選挙などを使って日本民族を全滅させようとしてるんだ。一刻の猶予もないんだ」

安田の血走った瞳を見つめ、精神病院に連れていくべきじゃないかと不安になった。この症状は、大人社会に対する恐怖からくる思春期に見られる被害妄想だ。このような被害妄想に取りつかれると常識的な理屈が通用しなくなってしまう。高校までは実に現実的だった安田が、なぜこのような妄想に陥ったのか？不思議でならなかった。誰かに洗脳されているのではないかと不安になった。「確かに、先輩の意見は正しいと思います。僕も、今の日本は危機にあると思います。だから、先輩と一緒にデモに参加しているんです。でも、武力はいけません。たとえこぶしといっても、暴力はダメです」

安田の目を見ていると人の意見が全く耳に入っていないようだった。とにかくまっとうな学生運動に戻さないと昭和の悲惨な連合赤軍になってしまうようで背筋がぞっとした。「先輩、とにかく革命の正義はわかります。でも、みんなの意見を取り入れて正々堂々とやりましょう。暴力に頼ってしまえば、それこそ、マフィアの思うつぼじゃありませんか。マフィアは、日本民族を暴力と麻薬の民族にしたいに決まっています。そんな手に乗ってはいけません。頭を冷やしてください」

安田の表情は悪霊に取りつかれたかのように薄気味悪かった。これはかなり重症だと思えたが、真っ向から反対したのでは治療にはならないと思い少し安田の気持ちをいやすことにした。「先輩は、責任感が強いから、少し頑張りすぎてるんです。学生は、先輩の味方です。力を合わせてデモをすれば、必ず、政治は変わっていきます。粘り強く、根気良く、頑張ってください。リノさんもそれを望んでいると思いますよ。もう少し、肩の力を抜いてください」

安田は、突然、テーブルに立ち上がりモーセのように両手を広げた。そして、悪魔が乗り移ったかのように声高に話し始めた。「俺は、モーセだ。神のお告げがあった。奴隷と化した日本民族を救う使命を受けた。日本民族こそ全人類を救うことができる。俺は、戦わねばならない。あ〜神の声が聞こえる。皆を導くのだ。神を信じよ。ならば、授けよう、神の力を」鳥羽は、腰を抜かしてしまった。もう手遅れではないかとさえ思えた。先輩は病気ですとは言えないし、どうしていいかパニックになってしまった。

ヒョイトテーブルから飛び降りた安田は、鳥羽をじっと見つめると表情を瞬時に変えた。マジな表情は、一瞬にして消え去り、満面の笑みが現れた。鳥羽は、完全にいかれてしまったと口をあんぐりと開けてしまった。安田の口から大きな声が飛び出した。「おい、なに、間抜けなツラをして。俺が、気でも振れたと思ったのか？俺は、マジだ。革命を必ず、成功させてみせる。鳥羽、仲間に入れ。お前が入ってくれば、きっと、革命は成功する。天才鳥羽の力が必要なんだ。頼む、革命軍に入ってくれ」

鳥羽は、あきれて口もきけなくなっていました。「先輩、気持ちはわかりました。だから、穏便に、みんなで力を合わせて、デモをやりましょう。テロみたいなマネをやれば、一生を棒に振ってしまいます。リノさんも僕と同じ意見だと思います。もし、先輩が警察に捕まれば、リノさんは悲しみますよ。結婚もパーになってしまいますよ。それでもいいんですか？先輩。冷静になってくださいよ。僕の気持ちも察してください。お願いですから」目を閉じてじっと耳を傾けていた安田は、何か考えているようだった。

腕組みをしていた安田は、二度うなずいて目を開いた。「そうか、革命軍に入る気はないんだな。鳥羽の意思は尊重する。実に、残念だ。日本は、すでに末期がんだ。命がけの手術をしなければ助からん。手遅れだとは思いますが、ヤマト民族は、やるだけのことはやらなければならん。学生が実権を握り、九州に共生を目指す新しいヤマト国家を作る。今、失敗を恐れてしまえば、ヤマト民族は消滅してしまう。たとえ、俺一人になっても戦う」

もはや安田の精神は常軌を逸していた。これ以上、止めても無駄なように思えた。「先輩の固い決意はわかりました。でも、僕は失敗すると思います。三島のように割腹自殺でもするつもりですか？先輩が、そこまでバカだとは思いませんでした。勝手にやってください。リノさんは悲しむと思いますけど」安田は、そんな意見には全く動じなかった。すでに、革命の日を決めていた。「リノには、悪いとは思いますが、ヤマト民族のために戦うのだ。許してもらえない」

鳥羽は、安田の決意が変わらないことを確信し、革命をいつ行うのか探りを入れることにした。「それじゃ、来年にでも、革命を決行するんですか？」安田は、目を見開いてギョロ目で答えた。「それは、極秘だ。たとえ親友の鳥羽でも、口にすることはできん。失敗すると決めつけているようだが、三島のような犬死はしない。俺たち学生は、破壊活動をするのじゃない、ヤマト国家の創造だ。そのためには、マフィアと戦わねばならない。同志、イスラエルの支援も取り付けた」安田は、鳥羽を見つめると右の口元を引き上げた。

革命は単なる妄想ではないように思えてきた。具体的な準備がどのようなものであるか是非とも知りたい気持ちにかられたが、これ以上の探りは無駄なように思えた。とりあえず話を替えて油断させることにした。「ところで、ゆう子姫に変な虫がついてないでしょうね。心配なんです。どうなんですか、先輩」突然訳の分からない質問をされた安田は、口をとがらせて返事した。「おい、そんなこと、俺の知ったこっちゃない。心配なら、自分で監視してろ。俺は、ゆう子の監視役じゃないぞ」

鳥羽は一気に話の流れを変えるため攻勢をかけた。「ちょっと、冷たすぎやしませんか？大親友じゃないですか。ゆう子姫が心配じゃないんですか？万が一、変な男に引っかかって、レイプでもされたら先輩の責任ですよ。あ～～、心配だな～～。ゆう子姫、今頃どうしておられるのやら」顔を真っ赤にした安田は、鬼の形相で反撃した。「おい、ゆう子がレイプされたら、俺の責任だと。まったく、お前の頭は、いかれてる。今頃、ゆう子は、楽しそうにイケメンとデートしてるんじゃないか？そう、この前、背の高いイケメンと一緒に校門の前を歩いていたぞ。あれは、間違いなく、ホテル直行だな」

イケメンと聞いた鳥羽は、突然立ち上がり、襲い掛かるような姿勢で問い詰めた。「何だと、イケメンと。いったいたれですか？そのイケメンとは。きっと甘い言葉に騙されて、ホテルに連れ込まれたに違いない。どうして、先輩は指をくわえて見ていたんですか？すぐに、ゆう子姫を救助しなかったんですか？まったく、頼りないんだから」徹底的に侮辱された安田は、堪忍袋の緒が切れた。「俺が頼りないだと。俺はお前の召使じゃない。ゆう子とも関係ない。ゆう子が誰とデートしようが勝手だ。そう、あのイケメンは、外人だったな。外人はかわいいアジア人が好きだというからな。絶対、やってるな」

鳥羽は左手の握りこぶをテーブルに打ち付けドンと大きな音を立てた。「イケメンって、外人なんですか。これは天下の一大事。日本人の女子は、背が高くてイケメンの白人にやられやすいんです。ゆう子姫もやられてるかも。いや、ゆう子姫はそんなに軽くない。いや、そう信じたい。とにかく、再度、外人のイケメンに会うようなことがあれば、ヤマト民族の一大事。先輩、今後、ゆう子姫を嚴重に監視してください。もし、外人が現れたら、ゆう子姫を緊急避難させてください」安田は、鳥羽の意味不明の言葉にあきれ返っていた。

安田は、ここまで頭がいかれているとは思わなかった。外人とデートしていたの言うのは嘘で、単に鳥羽をからかったに過ぎなかった。確かに留学生の男子と図書館で一緒に勉強はしていたが、デートかどうかは定かではなかった。この際、ゆう子姫のことをあきらめさせるために大嘘をついたのだった。「だからだな～～デートは個人の自由なんだ。いいじゃないか。ゆう子姫がそのイケメンが好きなら。前から言ってるだろ。ゆう子には彼氏がいるって。きっぱり、ゆう子姫のことはあきらめろ。あの様子じゃ、結婚の約束までしてそうだな～～」

鳥羽はますます興奮し始めた。デートは自由だが、イケメンの外人というのが気に食わなかった。ヤマト撫子が外人に略奪されてるようで無性に腹が立った。「先輩、ヤマト民族として恥ずかしくないんですか？ヤマト撫子が、外人に略奪されているんですよ。指をくわえてボケ〜とみていたんですか？情けない。いつそのこと、その外人をぶんなぐってやればよかったです。そうすりゃ、ゆう子姫も目が覚めたのに。ゆう子姫もゆう子姫だ。外人にだぶらかされるとは。ヤマト撫子の節操はどこにいったんだ」

安田は、鳥羽の妄想にあきれ返っていたが、ゆう子をうまく利用すれば鳥羽を革命軍に引き込めるような気がした。今、ゆう子が革命軍に賛同しているなどといえば、きっと発狂するに違いないと思いそのことは黙っていることにした。「おい、そんなにゆう子のことが心配なら、鳥羽がF大学のキャンパスでゆう子を監視すりゃいいじゃないか」鳥羽の妄想は暴走していた。「まったく、先輩はわかっていないんだから。僕が監視できないから、暇な先輩に頼んでるんじゃないですか。僕は、授業の後も教授について研究しているんです」

安田は、暇といわれてカチンときた。「おい、暇だとは何だ。俺は、毎日バイトしてるんだ。ひたすら、軍資金を稼いでいるんだ。俺は、ゆう子を監視するような暇はないんだ。まったく、お前の頭はいかれてる。大体だな〜、鳥羽は医者になるんだろ。だったら、ゆう子のことはきれいさっぱり忘れて、医学に専念したらどうだ。女子にうつつを抜かしていたら、国家試験に落ちちるんじゃないか。その時になって後悔しても後の祭りだぞ。そうだ、デモも勉強に差し支えるな。これからは、デモにも参加しなくていい」

目を吊り上げた鳥羽は、反論した。「僕を見くびらないでください。僕はそこいらの学生とは知能が違うんです。僕には神に与えられた三つの使命があるのです。ゆう子姫をお守りすること。姫島の島民を幸せにすること。日本民族を救うこと。この三つの使命をまっとうするためには、命も捨てる覚悟なんです。これからもデモに参加します。ゆう子姫が警察に殴られでもしたら、僕は地獄に送られてしまいます。昭和の安保反対デモでT大学の女子が殺されたんです。ゆう子姫がデモに参加する限りは、僕も参加します」

安田は、鳥羽を利用するにはゆう子を利用するのが最善であることに確信を持った。まずは、鳥羽の妄想愛に寄り添って、徐々に鳥羽を引き込む作戦に出た。「なるほど、鳥羽の愛は壮大な愛だな。俺のようなよこしまな愛とは違う。まったく、俺の愛はゲスの愛だ。いや、恥ずかしい。鳥羽のゆう子を思う気持ちは、凡人の俺にはわからんが、デモの最中でゆう子にケガをさせては、リーダーの俺としても責任を感じる。ちょっと、俺も言い過ぎた。これからも、デモに参加して、ゆう子を見守ってやってくれ」

急変した安田の態度に気持ち悪くなったが、少しは気持ちが通じたように思えて笑顔を作った。本心は、できればゆう子姫にはデモに参加してほしくなかった。デモの最中に暴漢に襲われて、ケガをすることは十二分に考えられることだった。安保反対デモの時は、現実には死者が出た。そのことを考えると、心配でならなかった。「とにかく、僕はゆう子姫をお守りいたします。先輩も、ゆう子姫をしっかりお守りしてください。といたいところですが、僕は、ゆう子姫には、デモに参加してほしくないのです。万が一のこともあるし、心配でならないんです」

安田は、ポンと胸を右手でたたいた。「俺を信用してないな。俺は、リーダーだ。ゆう子のことは俺が必ず守ってやる。ゆう子は、優秀な同志だ。俺の考えに全面的に賛同してくれている。これからも、同志として戦ってもらおう。ゆう子がいるだけで、同志が増えているんだ。ゆう子はジャンヌダルクのような存在だ。鳥羽の参加も大きな力になっている。これからも、頼む」鳥羽は、ゆう子姫がジャンヌダルクのようだといわれ、ますます不安になってしまった。また、みんなに祭り上げられて、革命軍に引き込まれてしまうのではないかという不吉な予感が湧き起こった。

鳥羽は革命軍を非難するきっかけを作るために話題を替えたのだったが、ゆう子姫を人質に取られてしまったような気分になり、これ以上革命軍を非難できなくなってしまった。「先輩の配慮はよくわかりました。でも、ゆう子姫を革命軍にだけは引き込まないでください。デモだけでも危険だと思っているんです。先輩も暴力行為だけはやめてください。警察沙汰になってしまえば、先輩の人生は地獄になってしまいます。リノさんも悲しみます。先輩には若旦那という未来があるじゃないですか。幸せな家庭を築いてください」

安田は、笑顔で返事した。「わかった。暴力はよくない。穏便な革命をやる。まあ、そう心配するな。必ず革命は成功する。連合赤軍みたいなバカなことはしない。あれはCIAの仕組んだお芝居さ。CIAにもマフィアにも、奴らの手には乗らないさ。一発勝負に出る。鳥羽は、学生運動のことは考えるな。医者になることだけを考えていればいい」穏便な革命という意味不明な言葉を聞いて、安田はいったい何を考えているのか？全く見当がつかなくなった。歴史上多くの犠牲者を伴ったいくつかの革命が起きた。だが、ソ連も中国もキューバも、結局崩壊した。

現在は、マフィアが多くの国家と多国籍企業を牛耳っている。今の流れでは、北海道は中国マフィアが、四国はロスの私有地だから別として、本州はアメリカマフィアが、九州はロシアマフィアが、支配する。もしかすると、安田はマフィアと戦うためにどこかの国と手を結ぼうとしているのかもしれない。そうであれば、一見穏便な革命になる。まさか、イスラエル？イスラエル国家をヤマト国家の同盟国にするというのか？YAP遺伝子といったのは、このことを意味していたのかもしれない。

仲間

そのころ、ゆう子、リノ、峰岸の三人は、前原のマックで落ち合っていた。最近、学生運動が激化するにつれて警察の警戒も厳しくなりつつあった。そのことに憂慮したゆう子は、警察の動きを探るため、婦人警官の峰岸を呼び出したのだった。ゆう子はオレンジジュースをチュ〜と吸って、ニコッと笑顔を作った。「そう、警察って、結構乱暴ね。デモを目の敵にしてるんじゃない。学生運動について、警察は何と言ってる？」峰岸は、交通係で学生運動に関しての仕事はしていなかった。今の仕事は、駐車違反の取り締まりが任務だった。

「デモでしょ。ちょっと乱暴よね。デモは、暴力じゃないんだから、もう少し、配慮すべきよ。私は、交通係だから、よくわからないけど、噂では、学生集会の取り締まりを強化するみたい。ここだけの話よ。絶対、他言しないと約束してくれる」ゆう子とリノは、目を丸くしてうなずいた。周りの客に聞こえないように峰岸は小さな声で話し始めた。「学生たちが、革命軍を作っているらしいのよ。内容は、よくわからないけど、F県警では、学生取り締まりのための特別班を先月作ったの。絶対、誰にもしゃべっちゃだめよ。いい」

革命軍と聞いたゆう子は、眉をひそめた。やはり情報は漏れていた。執行部の中にスパイがいると安田は言っていたが、そのことは事実だと確信した。リノは学生運動には無関心だったが、安田がたびたびデモをやっているのが気に食わなかった。「安田のやつ、休みっていうのに、私をほっぽらかしにして、デモでしょ。デモなんかして、いいことでもあるの？さっぱりわかんない。国会って、最後には、強行採決じゃない。それじゃ、デモなんかしても、意味ないじゃん。そう思わない？」

ゆう子と峰岸は、コクンと頭を落としてうなずいた。峰岸が愚痴をこぼした。「そうなのよ。今の国会って、意味ないんじゃない。議論しているようで、単なる時間つぶしって感じ。最後は、強行採決でしょ。いったい、国会は何やってんのよ。これで、近代国家といえるの。やってられないね。国民をバカにしてるんじゃない。本当に革命が起きればいいのよ。今の日本なんて潰れてしまえ。ガンバ、革命軍」ゆう子は、周りを見渡した。峰岸は、興奮して自分の声の大きさに気づいていないようだった。

ゆう子は、峰岸に声をかけた。「ちょっと、トーンを落として。気持ちはわかるけど、落ち着いてよ。確かに学生運動は全国的に活発化してるみたい。安田が、海外の同志も集めていると言っていた。もはや、日本だけの問題じゃないのよ。日本の悪政は、世界的に非難され始めたのよ。福祉国家の日本は、昭和の話よ。平成に入って、マフィア国家に突き進んでるのよ。その手始めに、強行採決をやって、マフィアの力を見せつけているのよ。カジノ許可、水道事業民営化は、まさにマフィアの策謀よ。日本は、マフィアに牛耳られたってわけ」

リノが身を乗り出して質問した。「え、なんだって。マフィア国家。いったいこれから日本はどうなるのさ。まさか、日本の温泉がぶっ潰れるってことはないでしょうね。うちには、多額の借金があるんだからね。温泉をつぶされたら、一家心中じゃない。どうしてくれるのよ。とにかく、マフィアは御免こうむるわ。安田に頑張ってもらわなくては。今の政府はマフィアの回し者に違いないわよ。日本を救うためだったら、一肌脱ぐわ。ゆう子、手伝うことはない？」峰岸もこのままマフィアの言いなりの政府が続けば、日本は不法地帯になって、アメリカと同じ犯罪国になってしまうような不安が込み上げてきた。

峰岸が不安げな顔つきで話し始めた。「三島も最近は、剣道より学生運動に明け暮れてるみたい。最近、九学連の執行部役員になったみたいで、夕方から執行部の会議に出席してるみたい。デートしたくても会議で忙しいといわれて、いつも断られるの。でも、学生にとっては、今後の日本のことが心配じゃない。今の現状で社会人になっても、マフィア企業の奴隷になるようなものだから。断固として、学生は立ち上がるべきなのよ。デートができないのは、悔しいけど、三島を応援する」

ゆう子は、安田の話を思い出しながら話し始めた。「安田も言っていた。一刻の猶予もないって。今の国会議員は、マフィアの言いなりだって。それと、国会議員はマフィアの怖さを知らないって。国会議員は、使い捨ての駒だってことがわかってないって。役に立たないとわかれば、簡単に抹殺するんだって。とにかく、女子も戦う時が来たのよ。男子も女子も力を合わせてマフィアと戦うのよ。ヤマト民族を守りましょ。くノ一の力を発揮するときが来たのよ。いい、これからは正念場よ。安田は、革命軍をつくると言っていた。情報が入れば、みんなに知らせるわ」

ゆう子はすでに革命軍執行部役員になっていた。だが、役員メンバーは極秘事項だった。というのも、革命軍には、イスラエル留学生もいたからだ。彼らはモサドとかかわりがあった。彼らは、日本の学生を是非とも支援したいと、九学連に参加していたのだった。また、革命軍の軍資金も支援したいと申し出ていた。日本に攻勢をかけているマフィアについての情報は、彼らから得たものだった。安田は、イスラエルの情報は、的を射てると判断し、彼らを同志と認めた。

ゆう子は、革命軍についての校長への報告は、躊躇していた。もう少し正確な情報をつかみたかったからだ。安田は留学生を同志と思っているが、彼らの情報の真偽はまだはっきりしていない。安田にもこのことは忠告しようと思っていた。確かに、留学生は日本の学生に好意を抱いている。しかし、完全に信用するのは危険だと判断した。ゆう子も安田から革命軍の具体的な作戦についてはまだ話を聞いていない。おそらく、具体的な作戦は、完全に信頼できる相棒にしか話してないように思えた。おそらく、それは三島に違いない。

少し不安げなゆう子の顔を見つめリノが話し始めた。「安田にも三島にも頑張ってもらわなくっちゃ。日本民族の未来がかかっているんだから。要は、最終的にヤマト国家を作ればいいのよ。小さくたっていいじゃない。温泉国家を作りましょう」ゆう子と峰岸は、顔を見合わせてクスツと笑った。ゆう子には、革命と温泉は関係ないと思えたが、リノにとっては、温泉産業の衰亡は死活問題であることには変わりなかった。旅館では、大量の水道水を使用する。水道料金が跳ね上がれば、コスト高になり、借金に頼っている旅館は、経営破綻の恐れも出てくる。

峰岸には、危険行為であることは承知の上で今後も警察の情報を流してもらうように依頼した。峰岸は、警察がマフィアに利用されれば、治安のためでなく、国民を取り締まる番人になってしまうような気がした。万が一スパイ行為がばれて始末されるようなことがあっても、三島と同志となれるのであれば怖くなかった。峰岸は、快く返事した。「とにかく、やるしかない。ヤマト民族を救えるのは、くノーと革命軍。よし。そいじゃ。さしはら温泉でパ〜とやりますか。ね、リノさん」

三人はリノが先月購入したばかりのエメラルドグリーンのスズキXBEEに乗り込んだ。すでに白のアルファードを持っていたが、安田にデート用にと勧められてスズキの特約店になっている安田自動車で購入した。助手席に峰岸、後部座席にゆう子が腰掛けた。峰岸が、甲高い声で叫んだ。「やっぱ、自家用車はいいな～～。めっちゃ、欲しい。三島の奴、まだ学生じゃい、車持たないのよね。貧乏人の三島には、無理だよな～～。やっぱ、私が買うしかないか。今の安月給じゃ、いつになることやら」

リノが即座に助け舟を出した。「そんなことなら、任せなよ。安田に頼んでやるから。どんなのがいい？」峰岸は、目を丸くして返事した。「安く買えるんだったら、何でもいいんだけど。できれば、三島が好きそうなの。リノさんに任せる。とにかくお金がないんだから、超安くて、すっごくかっこいいやつ」リノは、あまりにも調子のいい要望にワハハと笑いながら答えた。「超安くて、かっこいいやつね。安田に頼んでみる。コンパクトカーでかっこいいのがスズキにあるわよ。まあ、大船に乗った気持ちで、任せなさい」

峰岸は、大声で歓声を上げた。「やったー、ついにマイカーが手に入るのね。車があれば、デート、断れないでしょ。リノさんは、女神だわ。一生、恩にきます」リノは、自宅で二人にお昼のごちそうをしようと思っていたが、最近焼き肉を食べてないことに気づき、焼き肉を食べたくなった。リノは、二人に尋ねた。「佐賀牛焼き肉食べたくない。いいお店知ってるのよ。今日は、私のおごり、遠慮しないでいいから」峰岸は、またまた歓声を上げた。「マジ、うれし～～、絶対食べたい。佐賀牛！肉のダイヤモンドでしょ。今日は、一生で一番幸せな日かも」

リノが、ゆう子の返事を確認した。「ゆう子も焼き肉でいい？」ゆう子も笑顔で返事した。「今日は、大盤振る舞いね。でも、佐賀牛って、高いんですよ。いいの？」リノは、上機嫌で返事した。「うまくて、結構安い店を見つけたのよ。まあ、お金のことは心配しなくていいから。二人よりは、金持ちだから」リノは、ワハハ〜と笑い声をあげて、上場亭（うわばてい）目指して佐賀方面に走った。上場亭の駐車場に車を止めると三人は、店内に入った。

席に着くとリノはメニューを二人手渡した。「なんでも、好きなだけ食べて。ロースでも、ミノでも、タンでも、ジャンジャン頼んで」峰岸は、目をキョロキョロさせて、メニューとにらめっこしていた。お冷をウェイトレスが運んできた。三人は、お冷を飲むと一息ついた表情で笑顔を作った。アイパッドのような端末でリノはとりあえずロース、ミノ、タン、ライスを素早く注文した。「リノ先輩って、マジ、セレブですね。いつもこんなぜいたくなされているんですか？うらやましいな〜」リノは、最近旅館の経営がうまくいったため、金回りがよかった。

「いつもってことじゃないわよ。ただ、最近、旅館がうまくいってるから、ちょっとだけリッチかな。とにかく、遠慮なく食べてよ」リノは、ゆう子のかわいい服装にも感心していた。「ゆう子さんも、セレブって感じ。先輩たちって、セレブなんですね。うちは、ド貧乏だから。牛肉なんて、年に、数回。それも、安いやつ。金持ちのうちに生まれたかったな〜」ゆう子は、恥ずかしそうに話し始めた。「私が、セレブ。冗談でしょ。全然金持ちの家庭じゃないし。佐賀牛なんて、いつ食べたことか」

リノが運ばれてきた肉を焼き始めた。「ロースは、レアぐらいがおいしいから。少し焼けたら食べて」峰岸はレアに焼けたロースを慎重な手つきでつまみ上げタレにつけた。ロースを口に含んだ峰岸は、ニコツと笑顔を作った。「マジ、うま。こんなの初めて。生まれてきて、よかった。リノさんは、女神だわ」リノは、あまりのお世辞にくすくす笑い出した。「ゆう子はダイエット中みたいだけど、たまにはいいじゃない。佐賀牛はめったに食べられないんだから。上場亭の焼肉は、すっごく人気があるのよ。関西、関東からも来るんだって」

ダイエット中のゆう子だったが、神様に御免なさいと一言つぶやいてロースをつまみ上げた。ゆう子の顔にも笑顔がこぼれた。「マジ、うまい。かなり高級なお肉ね。これだったら、県外からやってくるのも納得」峰岸は、カルピスを飲んで、口をもぐもぐさせていた。なぜか、突然、峰岸が三島のことを愚痴り始めた。「三島ったら、デートぐらい誘えよな。こんな高級なお店でなくていいから。剣道ばっかし。ばっかじゃないの。バイトして、プレゼントしろ。何を考えてるのやら、バカな奴」

リノとゆう子は、じっと峰岸を見つめた。視線に気づいた峰岸は、顔を真っ赤にして誤った。「あ、ごめん、つい愚痴っちゃった」ゆう子は、峰岸の気持ちを察して話始めた。「なんというか、すれ違いつてあるんじゃない。三島君もそれなりに忙しいんだろうし。バイトもしてると思うよ。おそらく、峰岸のことを好きなんだと思う。ただ、照れ臭がってるだけよ」峰岸は、マジになって問い返した。「本当にそう思いますか？まったく、デートに誘わないんです。今年に入って、一度もないんです。避けてるんじゃないですか？」

リノが助け舟を出した。「男子って、そんなものよ。剣道に学生運動。それに、バイトじゃ、デートの時間はありやしない。でも、練習相手をやってもらってるんでしょ。だったら、ちゃんとデートしてるじゃない。急がば回れ、っていうじゃない。お金がたまったら、デートに誘うから。待ってな」勇気づけられた峰岸は、ほんの少し安心したのか、タンを放り込むと口をモグモグさせた。「三島んちも貧乏やし、しゃーないか。バイトやらんと、教科書かえんくらいやから。二人は結ばれるんでしょか？神様、教えてください」峰岸は両手を組んで天を仰いだ。

ちょっと深刻になってきたと思い、リノは元気づけることにした。「そう、悲観的になったら、ますます人生は、暗くなる。きっと二人は結ばれるわよ。縁結びの神様がいるんだから」峰岸は、笑顔を作ったが、また、悲観的なことを口走った。「でも、二人とも貧乏人なんです。三島は母子家庭で、うちも、おやじは、日雇いやし。おまけに、バカな弟が二人。結婚資金なんて、一生たまらないと思います。どうすればいいんですか？」リノは、自分が恵まれた家庭に育ったことを改めて実感した。ふと、名案が浮かんだ。

「よっしゃ、任せとき。結婚式は、さしはら旅館でやればいい。カンパしあって、パーティー形式でやればいいじゃない。だったら、お金はかからないし。そうしな」峰岸は、夢のような話に感激して歓声を張り上げた。「ほんと～～ですか。マジですね」峰岸は、両手で顔を覆って涙を流していた。ゆう子がそっと右手を肩に置き、声をかけた。「くノ一の仲間じゃない。助け合えばいいのよ。困ったことがあれば、一人で悩まずに、相談して」

神様という言葉でゆう子はイスラエル留学生との会話を思い出した。こんな場所で話すことではないと思ったが、最近、留学生イサクのことが気になって、もやもやしていた。ゆう子は、小さな声で二人に話しかけた。「ちょっと、聞いてくれる？」二人は、モグモグさせていた口を止めヒョイと顔をゆう子に向けた。「F大学にデモによく参加するイスラエルの留学生がいるんだけどね。最近、成り行きから、旧約聖書について教えてもらってるの。別に、宗教に興味はないんだけど、彼が言うには、日本人とイスラエル人は同志だって。二人は、どう思う」

峰岸が目を丸くして即座に答えた。「ちょっと、何が同志よ。イスラエルって、戦争ばっかやってる国でしょ。どうして、同志なの？それって、イスラエルナンパ戦法じゃない」あまりにも突拍子もない回答にリノは噴出した。「でも、同志というからには、理由があるんでしょ。根拠は何よ？」ゆう子は、マジな顔つきで答えた。「それがね、紀元前8世紀ごろに突然闇に消えたイスラエル十支族って知ってる？その謎に包まれた十支族の末裔が日本人だっていうの。嘘か本当かは、よくわからないけど、実際にその説を支持している学者がいるんだって」

リノが即座に返事した。「そいじゃ、日本人は、イスラエル人ってこと？まさか。日本人は、ヤマト民族でしょ。教科書で日本人は縄文人だって習ったような。歴史は苦手なんだよな～。とにかく、日本人は、日本人よ」峰岸もうなずきながら反論した。「まあ、大昔に、イスラエル人、中国人、韓国人、朝鮮人、ロシア人、などの外国人が、日本にやってきたって不思議じゃないけど、だからといって、日本人がイスラエル人と同じというのは、無理があるんじゃない。やっぱ、日本人は、教科書で習った四角い顔の縄文人よ。顔を見りゃわかるじゃない、鼻は低いし、ブサイクな男は多いし」

ゆう子も最初は信じなかったが、遺伝子のお話を聞いて少し信じるようになった。「それがね、DNAって知ってるでしょ。その中にある遺伝子にYAP遺伝子っていうのがあってね、その遺伝子は、中国人、韓国人にはなくて、なんと、イスラエル人、チベット人、日本人にあるんだって。だから、イスラエル人と日本人は同志らしいの。不思議っていえば、不思議ね」二人は、遺伝子を根拠にされると一瞬顔が固まった。

怪訝な顔つきで峰岸が反論した。「たとえ、同じ遺伝子があるからといって、イスラエル人と日本人が一緒ってことにはならないと思うよ。顔も言葉も風習も違うじゃない。日本は、仏教国だし、イスラエルは、ユダヤ教なんですよ。どこが似てるっていうの。それに、日本は反戦国で、イスラエルは戦争国じゃない。やっぱ、違うと思うな」リノも納得がいかなかった。「そのイスラエルの留学生は、ゆう子に気があるのよ。きっかけづくりに同志って言ったんのよ。まあ、そんなとこ」

ゆう子も留学生の言葉をうのみにはしていなかったが、日本とイスラエルとに共通する点をいくつか教えられて、今一つスッキリしなかった。「そうよね。日本人は、縄文人だと思うんだけど、カタカナはヘブライ文字とかなり似ていて、伊勢神宮の石灯籠には、イスラエル国旗のマーク六芒星（ろくぼうせい）が刻まれているんだって。八咫鏡（やたのかがみ）にもヘブライ語が書かれてあるらしいよ。そう、祇園祭の山車には、中東の絵がいくつも書かれているの知ってる。不思議といえば、不思議。日本って、なぞが多いのよ。だから、今、世界的に、日本の歴史が注目の的になっているんだって」

「ところで、その留学生って、イケメン。日本人に似てる？鼻は高い？目の色は？日本語話せるの？」ゆう子は、身を乗り出して話し始めた。「それが、天才じゃないかと思うぐらい、日本語が上手なのよ。ヘブライ語が母国語でしょ、でも、英語はペラペラ、ロシア語もできるんだって。旧約聖書を英語と日本語で教えてくれるのよ。すごくない。そんな天才が、田舎のF大学いるってのが不思議よ。顔つきは、間違いなくイケメン。堀が深くて、白人にしては、ちょっとブラウンかな。声も落ち着いていて、笑顔がまた女子の心をくすぐるといふか、すっごく、素敵。日本人の男子には、ああいうのは、いない。やっぱ、日本人は、イスラエル人じゃないな」

少し気分が楽になったのか、峰岸に笑顔が戻った。「リノさん。もう少し、ドライブしたい気持ち。ねえ、ドライブしましょうよ」リノは、ちょっと頭をかしげ即座に返事した。「そうね、鏡山（かがみやま）はどう。虹の松原が一望できて、最高の気分」リノが会計をすますと三人は、202唐津バイパス沿いにある鏡山に向かった。大きな赤い鳥居をくぐり抜けたXBEEは、頂上に向かって曲がりくねった坂道を軽快に走っていった。

同志

7月9日（月）、授業を終えたゆう子は、イスラエルの留学生イサクに出会えるような気がして、図書館に向かった。イサクはいなかったが、いつもの窓際の席に腰掛けた。そして、英書の「罪と罰」を目の前に置くと目を閉じて心を落ち着けた。パチッと目を見開いたゆう子は、しおりに指をかけ本を開いた。英文を読んでは、しばらく頭をかしげた。パツとひらめくと、まず、日本語で書き、次に文法に気を付けて英語に翻訳した。再来週までの宿題は、主人公ラスコーリニコフの殺人動機についてどのように考えるか？だった。彼の殺人動機には、金融社会が生み出した貧困が背景にあったため、政治経済に疎いゆう子にとっては難題だった。

先週の月曜日のことだった。憂鬱な顔でぼんやりしていた時に、いつの間にか初めて見る外人が左横に腰掛けていた。突然、彼は、流ちょうな日本語でイサクと申しますと丁寧な日本語で自己紹介した。突然の挨拶に面食らったが、イケメンに悩殺されたのかなんとなくうなずいてしまった。その時、ちらっと英書を見たイサクが、ドストエフスキーは好きですかと尋ねた。ゆう子は、ドストエフスキーの作品は、「罪と罰」しか読んだことがなく、文学的な質問をされてもどのように答えていいか戸惑ってしまった。そこで、返事に困惑したゆう子は、今悩んでいる宿題について相談した。プライドの高いイサクは、悲壮な表情に満足感を得たのか快くゆう子の質問に答えた。

できれば今日もイサクに宿題を手伝ってもらいたかったが、彼の姿は現れなかった。とにかく、今まで走り書きした英文をチェックすることにした。しばらく、血眼になって英文チェックしていると、またしても、いつの間にか左横にイサクが腰掛けていた。突然、ゆう子の耳元でイサクは話しかけた。「殺人動機については、いろんな考え方があるから、人の考えを知るのは楽しい。ゆう子さんは、神を信じますか？」突然の質問に目を丸くしたゆう子は、即座に返事ができなかった。一呼吸おいて、返事した。「いいえ、信じていません。宗教には関心がないんです。だから、宗教が背景にある文学は、苦手なんです」

イサクは、大きくうなずいた。「宗教は、難しいというか、いろんな事件の原因にもなっています。ドストエフスキーは、反ユダヤ主義者です。ユダヤ人を悪の根源みたいに憎んでいます。でも、ユダヤ人を憎む根拠はあるのでしょうか？彼は、歴史に残る優れた文学者だとは思いますが、ユダヤ人に対する批判的な思想には賛成できません。ユダヤ人が金融業で成功したからって、それを恨むのは、見当違いじゃないでしょうか。確かに、ユダヤ人は、経済面で世界を支配しているかもしれませんが、それは、ユダヤ人が知性において秀逸（しゅういつ）であることの証明に過ぎません。ゆう子さんも、ユダヤ人は、悪だと思われませんか？」

ユダヤ人の話は、全くちんぷんかんぷんだった。日本人には、歴史的に欧米人と違いユダヤ人との摩擦が全くなかった。今、日本人に関心があるのはイスラエルの戦争で、なぜ戦争をするのかだった。「まったく、ユダヤ人のことはわかりません。でも、イスラエルは、なぜ戦争を続けるのですか？日本人は、イスラエルをよく思っていない。むしろ、悪いイメージを持っていると思います。早く、戦争をやめるべきです。原爆被爆国の日本人の多くは、戦争に反対です。軍隊を持つことも反対です」

気落ちしたイサクは、ちょっと気まずそうな表情で反論した。「確かに、戦争はよくない。私も、一刻も早く戦争をやめさせたいと思っています。でも、今は、やむを得ないんです。イスラエルを存続させるには、戦争せざるを得ないんです。海外では、イスラエルがガザ地区やシリア、イランなどのイスラム系国家を攻撃しているように見られていますが、それは、誤解です。決して、イスラエルは他国を侵略などいたしません。あくまでも、国防のために、イスラエルの存続のために戦っているのです。このことをゆう子さんには、わかっていただきたい」

ゆう子は、戦争の理由は全く分からなかったが、メディアでは、イスラエルの戦争によって多くの子供たちが犠牲になっている悲惨な現状が報道されていた。このことを知れば、理由はともあれ、非難されてもやむを得ないと思えた。「でも、国防のためだといっても、戦争はよくないと思います。帰国されたらぜひ、反戦運動をやってください。お願いします」目を閉じたイサクは、小さくうなずいた。イスラエルが世界から非難されていることは承知していたが、日本人の女子に非難されるとイスラエルの国際的低評価を実感せざるを得なかった。ゆう子はイサクにノートを見せた。「ちょっと、チェックしてくれない」

He thought that the cause of the poverty was capitalism economy. Therefore he hated the finance business in the center of the capitalism economy. His younger sister made up her mind to marry a rich person to help with family finance. He hated oneself who could not do anything while understanding it and blamed oneself again. He who fell into a mental storm at least has committed murder. Therefore, the murder motive is regarded as a mental storm and madness.

イサクに走り書きの英文をチェックしてもらっていつと安田が不意に現れた。安田は、鳥羽にお願いされた手前、先週、ゆう子と一緒にいた外人がいるのではないかと思ひ様子を見に来たのだった。安田は、二人の勉強の邪魔になるとは思ったが、二人の関係に探りを入れるためにゆう子の正面に笑顔で腰掛けた。「やあ、俺も、たまには本を読むもので。そちらは、留学生？もしかして、ヤコブの友達？」イサクは、ヤコブを知っていることに驚きを現した。「ヤコブは、親友です。同じイスラエルからの留学生です。ヤコブの友達なんですか？」

安田は、ヤコブから親友の留学生がいることを聞いていた。ヤコブは革命軍執行委員の一人で安田は、彼の優秀さを知っていた。彼は、医学博士号の取得が目的で、国費でF大学に留学していた。「そうさ。彼は、同志さ。君もイスラエルの留学生ということは、秀才ってことだな。君は、学生運動はやらないのか？ヤコブは、デモに参加してくれてるんだが」イサクは、ちょっと間をおいて返事した。「デモは、僕の性に合いません。だからといって、学生運動に反対ではありません。頑張ってください。ヤコブは、天才です。きっと、日本のためになると思います」

ゆう子が、口をはさんだ。「安田。イサクも天才よ。旧約聖書について教えてもらってるの。安田も少しは勉強したら？それに、イスラエルの戦争についてもいろいろ教えてくれるの」安田も学生運動を始めるようになって、イスラエルとイスラム系国家との中東戦争について調べるようになっていた。イスラエルがある限り中東戦争はなくならないようにさえ思っていた。また、ユダヤ人は、歴史的に迫害されて、不幸な民族だとも思っていた。

「ちょっと、宗教は勘弁してくれ。でも、イスラエルの立場もわからんでもないんだ。いずれ、日本もイスラエルのような立場になってもおかしくない。確かに、国を守るために戦争することが正義だとは思わないが、国を存続させるためには、必然的に戦争は起きる。だから、ユダヤ人を責める気はない。むしろ気の毒に思っている。かわいそうな民族だ。なぜ、ユダヤ人は迫害されなければならないのか？俺には、さっぱりわからん。ヒトラーのユダヤ人虐殺は、全人類の犯罪だと思っている。日本人は、ユダヤ人のことをほとんど知らないのに、報道だけでユダヤ人を非難しているものがあるが、情けないことだ」

イサクは、安田のユダヤ人理解に感銘を受けた。欧米では、ほとんどの人はユダヤ人をよく言わない。日本人は、よくわからないといって話を濁してしまう。「安田さん。あなたは、我々の同志です。イスラエル国のために一緒に戦ってください。私も安田さんにできる限りのお手伝いをします。日本人は、ユダヤ人と同じ遺伝子を持っているのです。ともに協力し合って、戦いましょう」意気投合したのはいいが、イスラエルの戦争に賛成だとは一言も言っていなかった。

戦争を続ければ、アメリカとロシアのマフィアが儲かるだけで、イスラエル、ガザ、シリア、イラン、の子供たちが犠牲になる。これ以上子供たちに悲しい思いをさせてはならない。安田は、この思いを打ち明けた。「イサク。戦争はよくない。戦争は、一刻も早くやめるべきだ。子供たちが犠牲になってるじゃないか。とにかく戦争せずに、イスラエルの存続を考えなければならない。今、アメリカ、ロシア、中国のマフィアが国家を利用して金儲けしている。日本も危機に立たされている。これ以上、若者をマフィアの奴隷にするわけにはいかない。だから、日本をマフィアから守るために学生が立ち上がっているんだ。いざとなれば、九州に、学生主導のヤマト国を建国し、労働者のための企業を設立する計画なんだ。その時は、イスラエルの支援を求めたい」

イサクは、目を輝かせて耳を傾けていた。安田の野望に感銘したヤコブは、大きくうなずき返事した。「実に勇気ある決断。イスラエルの建国もヤマトの建国も民族の平和のためです。お互い、同盟国です。助け合いましょう。帰国後は、ヤコブも私もモサドの幹部になれる予定です。必ず、安田さんの力になれると信じています。私も、戦争には反対です。だから、国際協調を図ってイスラエルの存続を図っていきます」イサクの愛国心と反戦の気持ちがわかり安田も納得した。

イサクは同志であって、ゆう子の彼氏ではないことがわかり、ちょっと安心した。二人の勉強の邪魔をしてしまったと思い、引き上げることにした。「イサク。いつでもデモに参加してくれ。ヤコブも待っている」安田は、右手を差し出し握手を求めた。イサクも笑顔で応じグイッと握手した。「安田さん、日本にやってきて、いや、F大学にやってきて、本当に良かった。これからも、よろしく」安田は、椅子を引くと笑顔で立ち去った。ゆう子は、一人で好き勝手なことをべらべらしゃべって、いい気な奴と思ったが、能天気な安田らしいと思い、大目に見てやることにした。